

<横田教授の「コロナ」チェック>全道的に横ばい インフルとの同時流行へ備えを

2023年1月9日北海道新聞



道内の新型コロナウイルスの感染状況は札幌、札幌以外ともに昨年12月下旬まで順調に減少していましたが、1月に入り横ばいになりました。年末年始で医療機関の検査数は減少しており、正確な感染状況を把握するには、もう数週間様子を見る必要があります。一方で、道は12月下旬に季節性インフルエンザが流行期に入ったと発表しました。今後、コロナとインフルエンザの同時流行も考え、感染防止対策とともに、症状が出た時の備えもしておきましょう。

昨年12月26日～1月1日の1週間の新規感染者数は週平均で、札幌が前週比15.8%減の1433.1人、札幌以外が同23.3%減の2379.4人でした。それが1月2日～8日の1週間で横ばいになりました。札幌が前週比0.3%減の1428.9人、札幌以外が同0.5%減の2368.0人でした。

年末年始の発熱外来は札幌で通常の1割程度になるなど検査数が大幅に減ったため、全体の感染状況を把握しにくい状況です。ただ、検査数に影響されない札幌市の下水疫学調査でも、昨年12月26日～1月1日に検出されたウイルス濃度が前週比で横ばいでした。同調査は感染者数の増減を先取りする傾向があるため、今は感染者数が下げ止まっていると考えられます。

道内では、インフルエンザが3年ぶりに流行期に入りました。1月中旬には冬休みが明け、学校が再開します。今後、コロナと同時に流行する可能性は大いにあります。インフルエンザは乳幼児や10歳くらいまでの子どもがかかると、まれに脳症を起こす感染症です。マスク着用や手洗いを重点的にし、発熱などの症状が出た場合に備えて解熱剤や食料品の備蓄、どこを受診すべきかなど心の準備もしましょう。

政府ではコロナの感染症法上の位置付けを見直す議論が進んでいますが、法律上の位置付けが変わっても、ウイルスの特性は変わりません。流行期には人との接触を減らす行動を取るなど、感染状況に応じた対策を続けていきましょう。(聞き手・高木緑)